

前橋城(南曲輪地点)

— 地域活力基盤創造交付金事業（都市計画道路前橋公園通線
道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009.12

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

まえばしじよう みなみくるわちてん

前橋城（南曲輪地点）

— 地域活力基盤創造交付金事業（都市計画道路前橋公園通線
道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2009.12
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

は じ め に

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、赤城山と榛名山の裾野をぬって南北に利根川が流れる、四季折々の風情に溢れる県都です。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋八幡山古墳や前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・総社二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野國の中核をなす施設が次々に造られました。中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られています。

今回、報告書を上梓する前橋城は、かつて徳川家康より「関東の華」といわれた前橋城です。その築城は古く、15世紀末に長野氏によるとされています。この城は江戸を守る北関東の抑えとして、宇都宮、川越、忍と並び、関東四名城の一つに数えられたといわれます。

今回の調査では、残念ながら前橋城関係の遺構は堀跡に留まりました。しかし、平安時代の竪穴式住居跡の調査を行うことができ、歴史の移り変わりを辿れる結果となりました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本発掘調査事業の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました県・市関係部局・ロイヤルホテルの方々をはじめ地元関係者の方に感謝申し上げます。本報告書が本市の歴史研究や普及活動に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成21年12月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 戸塚 良明

例　　言

1. 発掘調査は、地域活力基盤創造交付金事業（都市計画道路前橋公園通線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から本書刊行に至るまでの経費は、前橋市の負担によって行った。
3. 発掘調査及び整理作業は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと、有限会社歴史考房まほらが実施した。
4. 発掘調査の事項は以下のとおりである。
 - ・遺跡名称 前橋城（南曲輪地点） 調査コード：21H48
 - ・調査主体 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明
 - ・遺跡所在地 前橋市大手町一丁目 135-1 ほか
 - ・調査担当者 神宮聰（同調査団）、高階敏昭（有限会社歴史考房まほら）
 - ・発掘調査期間 平成 21 年 6 月 30 日～7 月 22 日
 - ・調査面積 約 500m²
 - ・整理期間 平成 21 年 7 月 27 日～12 月 28 日
5. 発掘調査・整理作業に伴い、各作業を以下のとおり委託した。
 - ・基準点測量作業、遺構平面図の作成は山際哲章に委託した。
 - ・デジタル編集作業は村田優子、遺物写真撮影作業は山際哲章に委託した。
6. 本書の編集作業は高階敏昭が行った。執筆は I が神宮聰、その他を高階敏昭が担当した。
7. 本調査で収集した資料及び出土遺物は一括して前橋市教育委員会が保管・管理している。
8. 発掘調査及び整理作業に従事された作業員は以下のとおりである。（敬称略、50 音順）
発掘調査 阿部弘美・小島輝和・小関泰洋・閑口孝行・西島誠・福田稔
整理作業 小林貴子・澤田美恵子・澤田恵美
9. 本書作成にあたり多くの方々のご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。（敬称略、50 音順）
小野木恵美子・澤田修・澤田福宏・高階宣男・山下工業株式会社

凡　　例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行 1 / 25,000 地形図、国土地理院発行 1 / 5,000 前橋市現形図（1/2,500 を 50% に縮小）を使用した。
2. 遺構平面図の北方向は座標北方向を、水準線は標高を示す。座標は国家座標 IX 系を使用した。
3. 本書に掲載した各遺構図、遺物実測図、遺物写真の縮尺は各図下に記載した。
4. 遺物の色調は、農林水産省農林水産技術會議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を使用した。
5. 実測土器の中で口縁部の残存率が 1 / 2 未満の為、復元実測をしたものは、土器内面の口縁部線を中軸線から離して実測図を作成している。
6. 遺物観察表の計測値の < > は残存値を表す。
7. 遺物番号は、図面・写真図版・観察表ともに統一してある。
8. 本報告書の本文、土層注記で使用した火山噴出物は、浅間 A 軽石 : As - A、1783 年降下。浅間 B 軽石 : As - B、1108 年降下。浅間 C 軽石 : As - C、4 世紀初頭降下。
9. 遺構平面図、遺物実測図で使用したトーンは以下の通りである。■ は礎石・石、□ は炭化物出土範囲、■ は焦げ目に使用した。
10. 新旧関係については、不等記号を用いて「新>旧」で表現した。
11. 遺構種別の略号は、住居 = H、建物 = B、土坑 = D、井戸 = I、ピット = P、礎石 = 础石、堀・溝 = W とした。建物は各ピットや礎石とは別途に番号を付した。

目 次

はじめに

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 調査の方法と経過	4
IV 基本層序	4
V 検出された遺構と遺物	5
VI まとめ	20

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡図	2	第9図 1～4号井戸、1号建物、3・6・7号礎石遺構図	15
第2図 遺跡位置図	3	第10図 63・67・69・70・75・76・81・82・ 83・86・87・101・105号ピット、 1号掘、2・3号溝遺構図	16
第3図 基本堆積土層図	4	第11図 出土遺物実測図（1）	17
第4図 遺跡全図	6	第12図 出土遺物実測図（2）	18
第5図 調査区北側全体図	7	第13図 享保元年（1716）近世前橋城屋敷配置図	21
第6図 1・2号住居、 10～12・43号土坑・P 106 遺構図	12	第14図 廉政3年（1867）再築前橋城屋敷配置図	21
第7図 1～6・8・13～22・30・42号土坑遺構図	13		
第8図 23～29・31・33～41号土坑遺構図	14		

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	2・3	第5表 ピット・礎石一覧表	10・11
第2表 土坑一覧表	8	第6表 溝一覧表	11
第3表 井戸一覧表	9	第7表 遺物観察表	19
第4表 1号建物一覧表	9		

写真図版目次

PL.1 調査区北側全景 北から／調査区北側全景 南から	
PL.2 1号住居遺構確認状況 西から／1号住居掘り方全景 北から／1号住居貯蔵穴全景 西から	
1号住居掘り方遺物出土状況 西から／2号住居遺構確認状況 西から／2号住居掘り方全景 西から／ 2号住居カマド掘り方全景 西から／2号住居貯蔵穴セクション 西から	
PL.3 2号土坑全景 南西から／4号土坑セクション 東から／5・8号土坑全景 東から／ 11・12号土坑（1号住居床下土坑）全景 東から／11・12号土坑（1号住居床下土坑）セクション 東から／ 13・14号土坑全景 南から／13号土坑 炭化物・土器出土状況 南から／13号土坑遺物出土状況 西から	
PL.4 15号土坑全景 東から／15号土坑遺物出土状況 北東から／18・30号土坑全景 西から／ 28号土坑掘出状況 東から／34号土坑セクション 南から／36号土坑全景 北から／ 36号土坑セクション 北から／36号土坑 遺物出土状況 北西から	
PL.5 36～41号土坑周辺全景 南西から／37号土坑遺物出土状況 北西から／37・40・41号土坑セクション 西から／ 1号井戸セクション 南から／2号井戸セクション 南から／3号井戸セクション 南から／ 4号井戸全景 北から／調査区北側ピット群全景 北東から	
PL.6 1号建物全景 東から／遺跡東隣の明治初期頃の蔵 北東から／1号建物（33号ピット）礎石確認状況 東から／ 1号建物（38号ピット）礎石確認状況 南西から／1号建物（43号ピット）礎石確認状況 東から／ 1号建物（51号ピット）礎石確認状況 南から／1号堀全景 西から／1号堀深掘セクション 西から	
PL.7 出土遺物（1）	
PL.8 出土遺物（2）	

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、地域活力基盤創造交付金事業（都市計画道路前橋公園通線道路改良工事）に伴い平成21年4月16日に実施した試掘調査結果を踏まえ、4月23日付けで前橋市長 高木政夫（道路建設課）より埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受けた前橋市教育委員会より、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長 戸塚良明（以下「調査団」という。）に発掘調査実施について協議があった。しかし、調査団では既に市内数ヶ所において直営による発掘調査の実施を予定しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、6月23日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結した。その後、6月25日付けで調査団と民間調査組織である有限会社歴史考房まほら 代表取締役 笠原仁史との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査開始に至る。

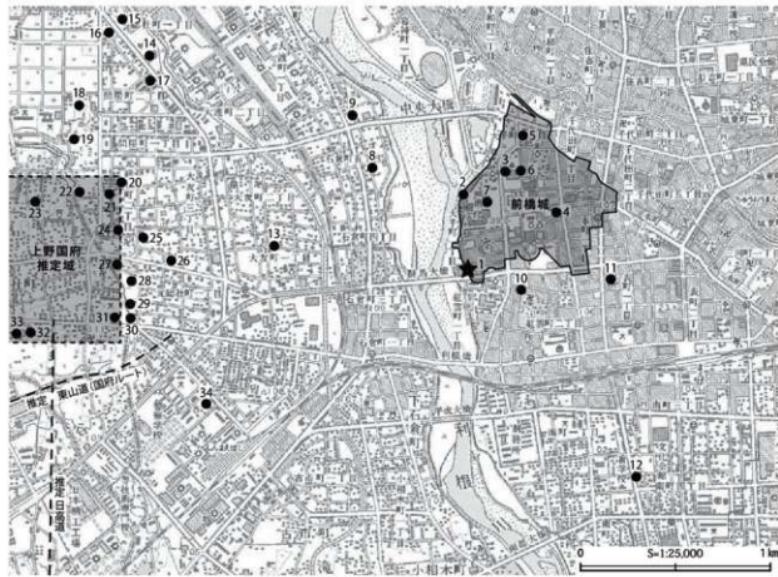
II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡は、標高約107mの前橋台地の北東端に位置する。前橋台地は広瀬川低地帯と井野川に挟まれた地域で、北方は榛名山から延びる扇状地、南方は高崎台地と接する。台地の中央を南流する現利根川は15世紀後半では前橋市街地の北東に帶状に延びる旧利根川流路を流れていたが、度重なる洪水等による影響で17世紀頃にはほぼ現在の流路に移動しており、台地の環境はこの間、激的に変化している。本遺跡地と利根川との比高差は断崖によって15mほどあり、想像を絶する暴れ川であったことを物語っている。前橋台地の堆積は、洪積世時代に利根川によってもたらされた扇状地堆積物とされている前橋砂礫層を基盤層として形成されている。その後、浅間山の山体崩落に起因する前橋泥流堆積物（21,000年前に堆積）や前橋泥炭層（13,000年前に堆積）が堆積し、さらに榛名山を起源とする縄文時代早期頃に堆積した総社砂層等により形成されており、扇状地と後背湿地があり粗んだ地形をなしている。現在、遺跡地周辺の土地利用は、官庁や住宅地として利用されており、北約200mには群馬県庁が、西隣には群馬ロイヤルホテルがある。

2. 歴史的環境

本遺跡の周辺では旧石器時代の遺構、遺物は確認されていない。縄文時代は、殆ど確認されていないが前橋城遺跡II（7）で前期後半の土器が出土している。弥生時代は、河川や谷地沿いで極僅か確認されている程度である。古墳時代は遺跡数が急増し、集落と生産遺構が数多く確認されるようになり、大友屋敷II・III遺跡（27）では集落が、元總社明神遺跡I～III（28）では同一遺跡から集落と水田が確認されている。また、古墳が各地で造営され6世紀初頭の前方後円墳である王山古墳（9）や、前橋城北曲輪遺跡（5）で円墳が確認されている。奈良・平安時代はさらに集落や生産域が拡大する。前橋城（4）（車橋門丸遺構の調査）では平安時代の住居が4軒、前橋城遺跡II（7）では住居・井戸・土坑等が確認でき、2号土坑からは灰陶軸器三足壺段皿が出土している。天神Ⅲ遺跡（32）では、住居・掘立柱建物・土坑等が確認でき、2号土坑からは八稜鏡が、住居からは香炉・大型円面鏡が出土しており、官衙的色彩が強い。生産遺構は、大友宅地添遺跡（13）で水田が確認されている。その他、元總社宅地遺跡I～23トレンチ（23）では住居・鍛冶場遺構・道路状遺構が確認されている。中世・近世以降は、本遺跡周辺地域は、室町時代に上野国守護代の長尾氏が築いた蒼海城（上野国府跡）の支配下であった。その後、長尾氏の衰退とともに勢力を伸ばしてきた箕輪城の長野氏によって築城された厩橋城の支配下に移る。利根川の対岸には武田信玄が厩橋城を攻める目的で築城した石倉城（8）がある。近世になると、厩橋城は、酒井忠世によって、城の整備が行われ近世城郭へと生まれ変わり、酒井忠清の時代に前橋城に改称されている。前橋城遺跡II（7）では、近世前橋城の堀・石垣・城門・橋と、再築前橋城の御殿玄関が確認されている。遺物は、筆頭家老「高須隼人」の侍屋敷の井戸から寛永・差出人が書かれた墨書き木簡が2点出土している。また、前橋城北曲輪遺跡（5）や前橋城三の丸遺跡（6）でも城内の侍屋敷が確認されており、居住者が判明している。

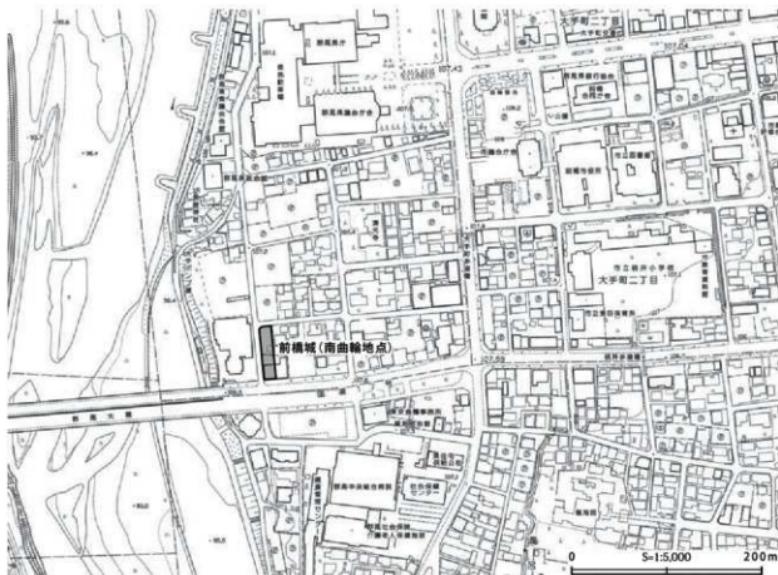


第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 S=1/25,000

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	検出された遺構と遺物	報告書及び文献
1	前橋城(南曲輪地区)	本署	本署所収遺跡
2	前橋城遺跡	近世:堀	2004「前橋城遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
3	前橋城三ノ丸遺跡	近世:自然浄路・穴・溝・井戸・埋植・建物跡、ビット列・ビット	1998「前橋城三ノ丸遺跡」前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会
4	前橋城(車橋門丸馬道橋の調査)	平安:住居・土坑、近世:堀・井戸・溝、現代:井戸・弊穴状遺構・埋設木樁、時期不明:土坑・ビット	2008「前橋城(車橋門丸馬道橋の調査)」前橋市教育委員会
5	前橋城北曲輪遺跡	古墳:円墳、中・近世:掘立柱建物・ビット・土坑・井戸・溝・池	2002「前橋城北曲輪遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
6	前橋城三の丸遺跡	古代:溝、中世:井戸、水田。近世:礎石建物・溝・井戸・土坑・ビット・弊穴遺構・石列	2007「前橋城三の丸遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	前橋城遺跡II	縄文:包括棺、平安:住居・井戸・土坑・溝、中世:堀・井戸・土坑・溝・堀・石垣、城門・橋・井戸・土坑・溝・側溝、建物	1999「前橋城遺跡II」群馬県教育委員会
8	石倉城跡	中世:利根川の流路変更で崩壊。	
9	玉山古墳	6世紀初頭築造の前方後円墳	
10	龍海院古墳	削平、現存せず	
11	前橋市第9号墳	飛鳥時代	
12	南町市之坪遺跡	古墳:平安:住居・掘立・土坑・ビット。パレス系窓	2008「南町市之坪遺跡」前橋市教育委員会
13	大友宅地浜遺跡	平安:水田	1998「大友宅地浜遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
14	稻荷塚東遺跡	古墳:住居・奈良・平安:住居・溝・カマド構築材状遺痕・井戸	2003「稻荷塚東遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
15	産業道路東遺跡	縄文:住居	1966「産業道路東遺跡」前橋市教育委員会
16	産業道路西遺跡	縄文:住居	?「産業道路西遺跡」前橋市教育委員会
17	稻荷山古墳	6世紀後半築造の円墳	

18	蛭社甲稻荷塚大道西道路・Ⅲ遺跡	古墳：住居・奈良・平安・住居・溝、中世：墓、近世：溝	2001「蛭社甲稻荷塚大道西道路・Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
19	蛭社甲稻荷塚大道西道路・Ⅳ遺跡、蛭社闇室光明神北畠遺跡	繩文：住居、古墳：住居・塼、奈良・平安：住居・墓、溝、中世：墓	2002・2003「蛭社甲稻荷塚大道西道路・Ⅳ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 「闇室光明神北畠遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
20	闇室塼遺跡	奈良・平安：溝	1983「闇室塼遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
21	闇室塼南遺跡	古墳：住居・奈良・平安：溝	1985「闇室塼南遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
22	蛭社闇室光明神北遺跡・Ⅱ遺跡・V遺跡、元蛭社新海道路群（7・9・10）	古墳：住居・水田・窓・溝、奈良・平安：住居・溝・塼、中世：溝	1999・2001・2004～2006「蛭社闇室光明神北遺跡・Ⅱ遺跡・V遺跡、元蛭社新海道路群（7・9・10）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
23	元蛭社宅地遺跡1～23トレンド	古墳：住居・奈良・平安・住居・塼立・戰治場・溝、道路状遺構、中世：溝、近世：住居・五輪塔	2000「元蛭社宅地遺跡1～23トレンド」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
24	屋敷遺跡・Ⅱ遺跡	古墳・奈良・平安：住居・中世：塼・石敷遺構	1986・1995「屋敷遺跡・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
25	塼越Ⅱ遺跡	平安・住居	1988「塼越Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
26	塼越遺跡	奈良・平安：住居・溝	1987「塼越遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
27	大友屋敷Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡	古墳：住居・平安・住居・溝・地下水坑	1987「大友屋敷Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
28	元蛭社光明神遺跡1～XIII	古墳：住居・墓・水田・奈良・平安：住居・溝・大型人形、中世：住居・溝・天日茶碗	1982～1990「元蛭社光明神遺跡1～XIII」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
29	元蛭社寺田遺跡I～Ⅲ	古墳：水田・溝・奈良・平安：住居・溝・中世：溝	1988～1991「元蛭社寺田遺跡I～Ⅲ」前橋市埋蔵文化財調査事業団
30	寺田遺跡	平安：溝・木製品	1986「寺田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
31	元蛭社小学校短遺跡	平安：塼立・住穴群・周濠	1962「元蛭社小学校校庭遺跡」前橋市教育委員会
32	天神田遺跡	奈良・平安：住居・塼立・土坑・溝状・ビット・八幡鏡・綠釉陶器・大型円筒巻・香炉、中世：溝状（塼）・道路状遺構	2008「天神田遺跡」前橋市教育委員会
33	天神遺跡・Ⅱ遺跡	奈良・平安：住居	1986・1988「天神遺跡・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
34	元蛭社稻葉遺跡	繩文：土坑、平安：住居・瓦塔	1993「元蛭社稻葉遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団



第2図 遺跡位置図 S=1/5,000

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

前橋市埋蔵文化財発掘調査団が行った試掘調査の結果、住居・土坑・井戸・ピット・堀等の遺構が存在することが明らかになった。遺構の確認面は、表土下約30cmの黄褐色土で確認することができる。発掘調査の開始にあたり、アスファルト舗装の除去を行い、残土置場を確保するため調査区を北と南に分けて南側から表土除去作業を行った。残土にはネットをかけて周辺住民への配慮を行った。座標は、世界測地系第IX系を使用した。遺構確認はジョレン等で行い、遺構の掘り下げは移植ゴテを基本とし、適時必要に応じて鏝廉・スコップを使用した。調査は、ベルトを設定し遺構毎に土層の観察を行ながら掘り下げ作業を行った。遺構平面図は、器械測量で行い、底面や下層から出土した遺物は、器械測量で位置を計測しNoを付けて取り上げ、覆土中の遺物は遺構毎に一括で取り上げた。写真撮影は35mmカラーリバーサルフィルム、同カラーネガフィルム、同モノクロルフィルム、デジタルカメラの4種類を使用した。

2. 調査の経過（平成21年6月30日～7月22日）

6月30日 アスファルト舗装撤去作業。発掘調査を開始。

7月1日 調査区南側部分の調査開始。安全対策作業。重機搬入後表土除去を行う。

7月2日 1号堀の調査終了。測量、写真撮影を行う。

7月3日 1号井戸の調査終了。測量、写真撮影を行う。調査区南側部分調査終了。

7月6日 調査区北側部分の調査開始。土坑、ピット・礎石、井戸の掘り下げ作業開始。

7月13日 1号住居の掘り下げ作業開始。土坑、ピット、井戸の測量、写真撮影。

7月16日 2号住居の掘り下げ作業開始。土坑、ピット・礎石の測量、写真撮影。

7月19日 ピット・礎石、井戸、溝等の測量、写真撮影後調査終了。

7月21日 1・2号住居、土坑の測量、写真撮影後調査終了。基本堆積土層の確認作業。

7月22日 プレハブ・トイレ・発掘器材・資材等の撤収作業。重機で埋め戻し完了。発掘作業を終了する。

IV 基本層序

基本層序はI～XII層に分層でき、I・II層は現代の擾拌で調査区の全域に堆積する。III層は黒褐色土で浅間C軽石を微量含む。削平の影響で確認できたのは調査区北側の一部であるが、この層から振り込まれる古代や近世・近代以降の遺構が確認できる。IV層は白色軽石を含む黄褐色シルトの水成堆積であることから総社砂層と思われる。殆どの遺構はIII層が削平されているため、この層の上面が遺構確認面になる。V層は、色調が異なるがIV層とほぼ同様の堆積である。VI・VII層は黒（黒褐）色シルトの腐植層で、前橋泥炭層と思われる。遺物は出土しなかった。VIII～XII層は各層位で色調が多少異なるが概ね黄褐色～白色系で、共通して白色軽石を微量含むシルト質系の水成堆積であることから洪水層と思われる。遺物の出土はIV層以下からは認められなかった。



第3図 基本堆積土層図

基本堆積土層 南から

V 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、住居2軒、建物1棟、土坑40基、井戸4基、ピット・礎石131基、壠1条、溝2条で壠を除き調査区中央～北側に分布する。帰属時期は住居・土坑・井戸・ピットが古代で、建物・土坑・井戸・ピット・礎石・壠・溝が近世・近代以降に属する。遺構の遺存状況は、調査区全域にわたり後世の削平の影響であまり良くなく、特に調査区南側は黄白色シルト（V層）まで削平が及んでいたため遺構が消滅した可能性が高い。南端に位置する1号壠は遺構確認面から1～2m程削平されており壠の立ち上りは不明瞭であった。この1号壠は前橋城の壠に該当し、ほぼ同時期の建物、土坑、ピット・礎石が調査区北側を中心に確認されている。調査区北側に位置する住居は、床面が削平され残存していたのは掘り方と床下土坑のみであった。

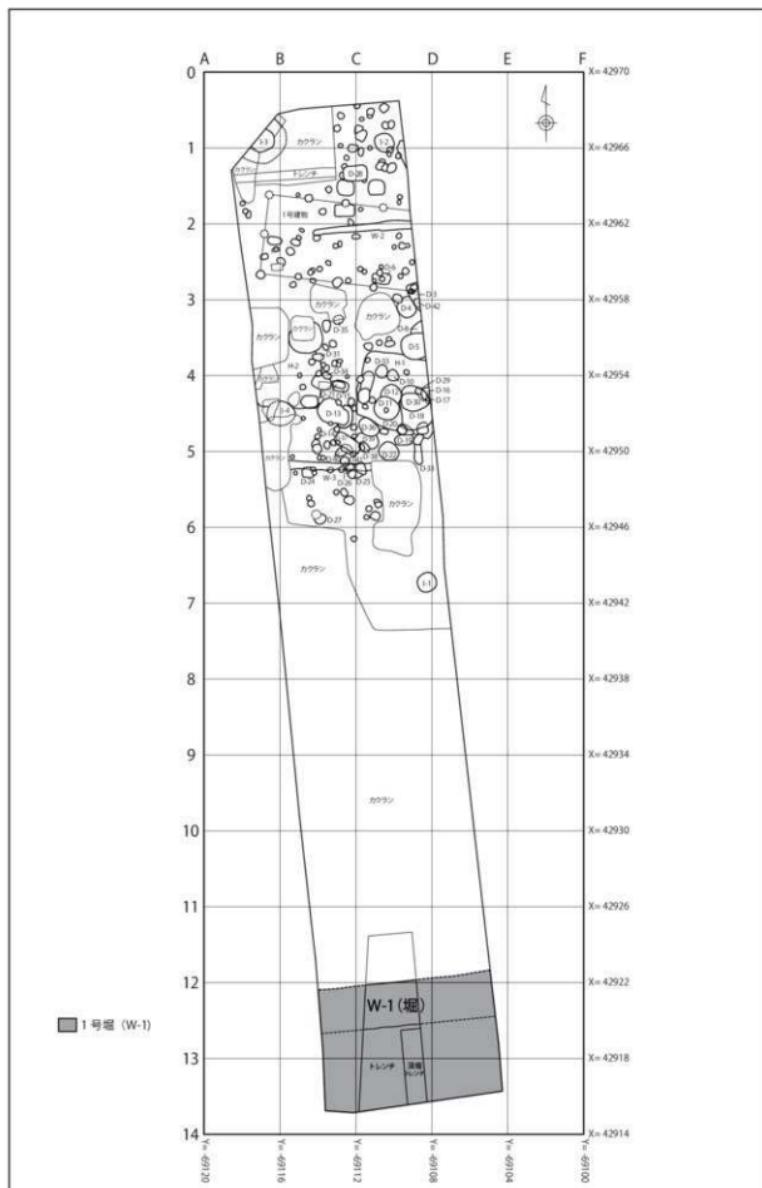
1. 住居

1号住居跡（H-1）（遺構：図面第6図、写真PL2 遺物：観察表第7表、図面第11図、写真PL7）

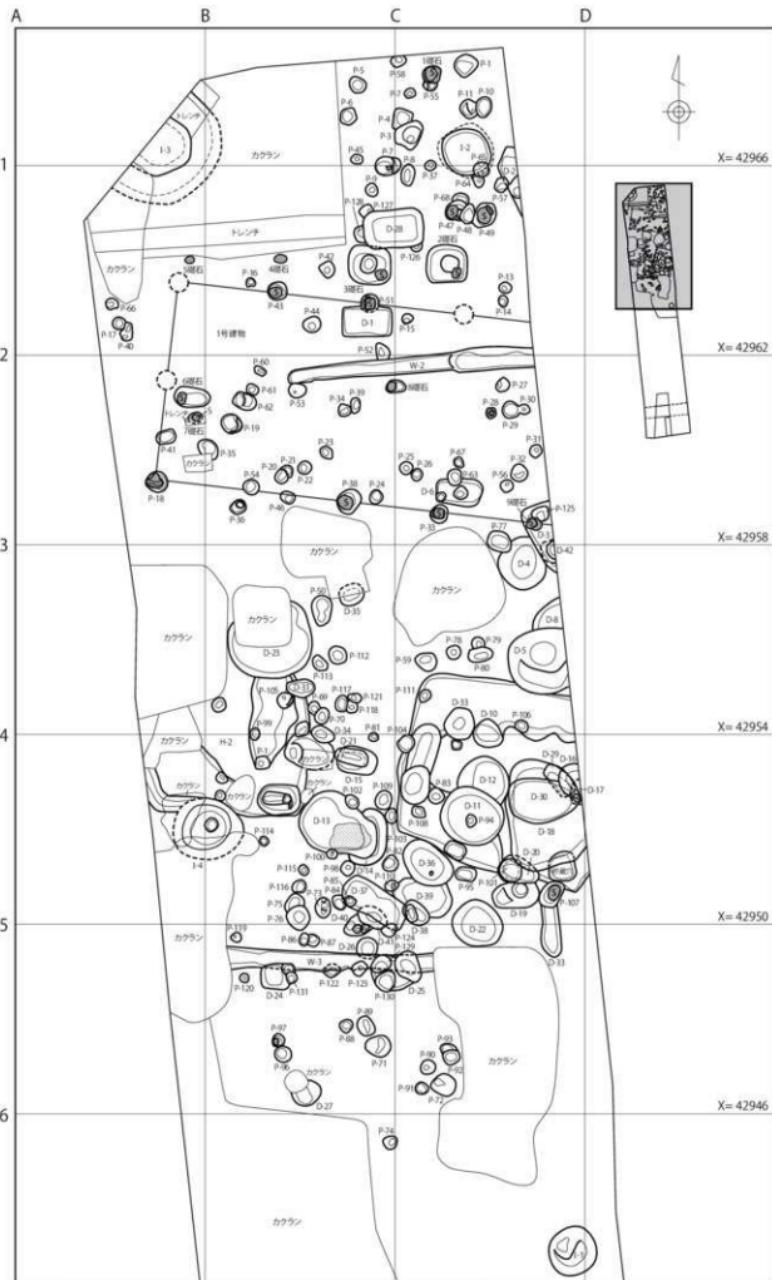
床面が削平され掘り方のみの調査である。位置 C3・C4グリッド。規模 東西4.2m、南北4.0m、壁面高23cm。面積 約16.8m²（推定）。平面形態 方形。主軸方向 N17°E。カマド 調査区外のため確認できない。貯蔵穴の位置から判断して東カマドと思われる。壁周溝 確認できない。柱穴 本住居に伴う83・106号ピットを2基確認したが、主柱穴であるかは不明。貯蔵穴 住居南東隅に設置されていた。平面形は隅丸方形で、規模は長径65cm、短径57cm、深さ28cmである。掘り方 黄褐色土ブロックを主体とした人為的埋め戻し土である。床面から平均5～10cm掘りこまれ、住居中央が高く残る。全体的に多少の起伏がみられる。住居中央から東側に位置する11・12・30号土坑は配置関係、形態、覆土の状況から本住居の床下土坑と判断した。詳細については、土坑の項で参照されたい。遺物 掘り方の全域から土師器壺・甕片・須恵器壺片が出土しているが接合する遺物は少ない。（1）は土師器壺、（4・5・7）は須恵器壺、（6）は蓋で共に西壁付近から出土している。貯蔵穴からは土師器甕（3）、土師器壺（2）が底面から出土している。床下土坑である11号土坑の覆土中から土師器壺（10）、須恵器壺（11）が、12号土坑の覆土中からは、須恵器壺（12）、刀子（13）の柄部分が出土している。その他土師器甕片が少量出土している。30号土坑からは遺物は出土しなかった。重複関係 5・16・17・18・20・29・43号土坑、101・104・107・108・111号ピットと切り合うが本遺構が古い。帰属時期 出土した遺物の特徴から9世紀代と思われる。

2号住居跡（H-2）（遺構：図面第6図、写真PL2 遺物：観察表第7表、図面第11図、写真PL7）

1号住居と同様、掘り方のみの調査である。位置 A3・A4・B3・B4グリッド。規模 東西3.35m以上、南北3.05m以上、壁面高16cm。面積 約10.0m²以上。平面形態 方形。主軸方向 N2°E。カマド 東壁の中央やや南側に位置する。掘り方面で確認長1.08m、燃焼部幅0.78mを測る。覆土は焼土ブロックと黄褐色粘質土との混土層が主体で、カマド中央部の底面から被熱した川原石が1点出土している。壁周溝 西壁と南壁の一部で確認したが、西・北壁は搅乱や23号土坑で破壊され不明である。柱穴 カマドの前面付近で99・105号ピットを確認したが、主柱穴であるかは不明。貯蔵穴 住居南東隅に設置。平面形は隅丸長方形で、規模は長径93cm、短径68cm、深さ27cmである。底部は東西に細長く、北側にピット状の掘り込みを持つ。断面形状は階段状である。掘り方 住居中央部分を高く残し平均10cm掘り込む。特にカマドの前面から北側は長梢円形に深く掘り込む。全体的に多少の起伏がある。遺物 カマド、貯蔵穴を主体に土師器壺・甕片・須恵器壺片が少量出土しているが、碎片が多く接合できない。（8・9）は土師器壺片でカマド掘り方の覆土中から出土した。重複関係 4号井戸、23・31・34号土坑と切り合うが本遺構が古い。99・105ピットは覆土の状況から本遺構に伴うピットと判断した。帰属時期 出土した遺物の特徴から9世紀代と思われる。



第4図 遺跡全体図 S=1/250



第5図 調査区北側全体図 S=1/100

2. 土 坑

土坑は40基を確認した。調査区中央～北側に分布し、その殆どが1・2号住居の周辺に集中するか、もしくは切り合い関係にある。形態は平面形が、円形、楕円形、長椭円形、隅丸方形、隅丸長方形とバラエティーに富み、断面形は皿状や弧状が多く削平の影響で比較的浅いものが多い。これらの土坑の殆どは、覆土の特徴や出土した遺物の年代が1・2号住居と類似することから古代の土坑と判断した。しかし、平面形が隅丸長方形や隅丸方形の土坑の一部には、近世・近代以降のビット・礎石、溝の覆土と類似し、この遺構を切って構築されている土坑（1・21・24・25・28号土坑）があり、それらについては近世・近代以降の土坑と判断した。

このように、確認した土坑の殆どが1・2号住居とほぼ同時期の土坑である。そこで、35基の古代の土坑の中で特徴的なものについて言及する。「V章 1.住居」の項でも触れたが11・12・30号土坑は覆土の状況、形態、配置関係から1号住居に伴う床下土坑である。この土坑は平面形が円形または楕円形で、断面形が皿状の比較的浅い大型の土坑である。11号土坑の壁面には、黄褐色粘質土が貼られ、土坑内には灰や焼土が多量に含まれていた。1号住居の北隣に位置する8号土坑（単独土坑）も同様の土坑であることから、床下土坑と考えられる。また、黄褐色粘質土は貼られていないが4・5・13・14・22・23・39号土坑（単独土坑）も1号住居の床下土坑と形態、特徴が類似することから、床下土坑の可能性が考えられる。15・34・36号土坑は、覆土中に多量の焼土や炭化物がブロック状に含まれていた単独土坑である。1・2号住居の周辺で確認されており、調査段階ではカマドの可能性を考えたが、住居プランやカマドの使用面が確認できないため土坑として調査した。しかし、形態、覆土の状況、長軸方向が2号住居のカマドや1号住居の主軸方向とほぼ一致すること、2号住居のカマドも掘り方部分しか残存していないかった状況を考慮すると、これらの土坑はカマドの掘り方部分の可能性が考えられる。遺物は34号土坑からは出土しなかったが、15・36号土坑からは土師器環・甕、須恵器環が出土しており、15号土坑からは、土師器環（16）が西壁際の焼土ブロック土中から出土している。

なお、土坑の個別の詳細については一覧表にまとめて表記した。

第2表 土坑一覧表

遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	新旧関係	時期	備考
1	B 1	圓丸形	台形	105	63	26	陶器屑	P51 <	近世・近代以降	
2	C 0・C 1	半円	圓柱	145以上	47以上	38	—	P53 >	古代	
3	C 2・C 3	半円	圓柱	152以上	65以上	31	須恵器環	9号土坑+P125・42セ	古代	
4	C 2・C 3	半円	圓柱	105	92以上	15	土師器環・甕	P77 >	古代	床下土坑か
5	C 3	円形	圓柱	139	115以上	25	—	H 7・11 <	古代	床下土坑か
6	C 2	圓丸長方形	圓柱	98	58	10	土師器環	P63 <	古代	
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	C 3	円形か	圓柱	96以上	56以上	22	—	3号土坑	古代	前面に転落した木柱跡か
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	C 3・C 4	楕円形	圓柱	65	60	10	土師器環	11号との転日本不明	古代	1号との伴う土坑
11	C 4	円形	圓柱	132	118	23	土師器環・甕、須恵器環	12号 <	古代	1号の隣の土坑
12	C 4	円形か	圓柱	107	73以上	15	月刀・土師器環・甕、須恵器環	11号 >	古代	1号の隣の土坑
13	B 4	楕円形	圓柱	173	128	28	土師器環・甕、須恵器環	P100・102 >, 14号 <	古代	床下土坑か
14	B 4	楕円形	圓柱	122	73以上	13	土師器環、須恵器環	13号 >	古代	床下土坑か
15	B 4	楕円形	台形	83	60	18	土師器環・甕、須恵器環	21号 >	古代	カマド掘り方部分か
16	C 4	円形	圓柱	72	47以上	31	—	18・29・30・14号 <	古代	
17	C 4	円形	ロート状	46	6-7明	34以上	—	16・18・29・30号 <	古代	
18	C 4	圓丸形	圓柱	100	53	32	土師器環・甕、須恵器環	16号・17号・18号・30号P101・14号 <	古代	
19	C 4	圓形	台形	94	26	—	土師器環	20号 <, P101 >	古代	
20	C 4	圓形	圓柱	88	60	17	土師器環・甕、須恵器環	19号・P101・14号 <, 14号 >	古代	
21	B 4	圓形	圓柱	73	33	14	—	15号 <	近世・近代以降	
22	C 4・C 5	円形	圓柱	110	91	10	—	—	古代	床下土坑か
23	B 3	円形	圓柱	177	159	33	—	2号 <	古代	床下土坑か
24	B 5	圓丸形	圓柱	73	55	11	—	3号 <, P131 >	近世・近代以降	
25	B 5・C 5	圓丸形	台形	101	77	14	—	P129・130・1号 <	近世・近代以降	
26	B 5	円形	圓柱	46	44	11	須恵器環	3号 >	古代	
27	B 5	円形	圓柱	52	37以上	8	土師器環	—	古代	廻丸底壙
28	B 1・C 1	圓丸形	台形	128	80	34	土師器環、須恵器環	P126・127・128 >, 3号との転日本不明	近世・近代以降	出土物が壙に埋れ込み
29	C 4	圓丸形	台形	28	38	23	土師器環・甕	16・17・18号 <, 30号 <	古代	1号との転日本不明
30	C 4	楕円形	圓柱	150	132	37	—	16・17・18・29号 <	古代	1号の隣の土坑
31	B 3	楕円形	圓柱	60	40	13	—	Z 6 <	古代	
32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
33	C 4・C 5	圓丸形	圓柱	106	43	10	土師器環・甕、須恵器環	P107 >	古代	
34	B 3・B 4	圓形	圓柱	46	33	11	—	2号 <	古代	カマド掘り方部分か
35	B 3	圓形	台形	52	22	29	土師器環・甕	—	古代	廻丸底壙
36	C 4	圓形	圓柱	116	81	17	土師器環・甕、須恵器環・鏡	39号 <	古代	カマド掘り方部分か
37	B 4・C 4	圓丸長方形	圓柱	95	67	10	土師器環・甕、須恵器環・鏡・鏡	40・41 <, 38号・P84・85 >	古代	39号との転日本不明
38	C 4	圓形	台形	60	43	19	土師器環・甕、須恵器環・鏡	37・39号 <	古代	
39	C 4	圓形	圓柱	125	80以上	11	土師器環・甕	P110・36・38号 >	古代	37号との転日本不明
40	B 4・C 5	圓形	圓柱	41以上	44	13	須恵器環	41号 >	古代	床下土坑か
41	B 4	圓形	台形	66	41	23	土師器環	40号 <, 37号 >	古代	
42	C 2・C 3	半円	台形	47	9明	26	—	3号 <	古代	
43	C 3	円形	台形	67	62	35	—	1号との転日本不明	古代	1号の伴う土坑

3. 井戸

調査区中央～北側で4基の井戸を確認した。構造はすべて素掘りの井戸で、1・4号井戸の底面には浅い円形状の水溜施設が確認できたが、2・3号井戸は崩落の危険性があり、底面の確認ができなかった。平面形は3号井戸を除きほぼ円形で、断面形は1・2号井戸がU字状、3号井戸が階段状、4号井戸が漏斗状とバラエティーに富む。壁面の状況はほぼ垂直に立ち上がるが、2・4号井戸は壁面の崩落が認められ一部大きく抉られていた。覆土の状況は、1・4号井戸は上層～下層まで人為的な埋め戻し土であるが、2・3号井戸は崩落の危険性があり下層の確認まで至っていないが、中層までは人為的埋め戻し土であった状況を考慮すると下層部も同様の堆積である可能性が高い。堆積状況は1～3号井戸は水平または斜位の堆積であるが、4号井戸は下層～中層が斜位の堆積、上層は水平堆積で埋め戻しが行われており、上層と中層との間で埋め戻し時における時間的幅を感じる。遺物の出土は4基とも極少量である。1号井戸からは、最下層から縁釉陶器片(26)が、2号井戸からは土師器環片が、3号井戸からは須恵器環片(27)が、4号井戸からは土師器環・甕片、灰釉陶器碗片(28)が出土している。帰属時期は1・2・4号井戸が、覆土の状況や遺物の年代観から9世紀代のものと思われ、ほぼ住居の年代観と一致する。3号井戸は上位の断面形が階段状(段掘り)で、石囲い井戸の可能性が高いことから近世・近代以降のものと思われる。出土した遺物は埋め戻し時の混入遺物である。

なお、個別の詳細については一覧表にまとめて表記した。

第3表 井戸一覧表

遺物番号	グリッド	平面形	断面形	斜位	深度 (m)	幅さ (m)	壁面	堆積	地盤	遺物	新旧関係	備考	
1	C 6 + D 6	円形	円形	なし	107	101	131	直壁	人為的埋め戻し土	古代	田畠跡、縁釉陶器	本部塗あり	
2	C 7 + C 1	円形	円形	なし	103	97	135以上	直壁	人為的埋め戻し土	古代	土師器环	P65+ > 中古	
3	A 0 + A 1 + B 0	円形か 縁円形か 縁円形	縁円形	250(底径)	140以上	175以上	直壁	人為的埋め戻し土	直壁+ 蓋付	直壁面+ 瓢	縁は直付込み 石囲い	石囲いのみ付	
4	A 4 + B 4	円形	ロート状	なし	120	130	195	直壁	人為的埋め戻し土か	古代	土師器環・甕、田畠跡、灰釉陶器	2段<	本部塗あり

4. 建物 (B-1)・ビット (P)・礎石

調査区中央～北側でビット・礎石を計131基確認した。調査区南側は概略で破壊されていたため確認できなかった。ビットは覆土の特徴や遺物の年代から2時期に分類した。①黒(黒褐)色土で粘性があり、焼土粒・ブロック、炭化物、白色軽石が含まれるもの、②暗灰色土または、黄褐色(にぶい黄褐)土で粘性がなく、①の含有物を殆ど含まないものに分類できる。①は30基認められ本遺跡で確認した古代の住居や土坑の覆土と類似し、同時期の土器片が出土することから古代のビットと判断した。用途は不明だが古代住居のビットの可能性を考えられる。分布は調査区中央の1・2号住居周辺に集中するが、調査区北側でも確認できる。遺物は土師器環・甕、須恵器環・蓋、灰釉陶器が極少量出土している。灰釉陶器は50・84・125・129号ビットから出土しているが殆ど資料化ができない細碎片で、唯一129号ビットから出土した灰釉陶器碗片(29)は資料化が可能であった。②は101基認められ調査区北側～中央に分布し、礎石又は礎石を作りビットと同一の覆土を持つ。遺物は殆ど出土していないが陶器片が極少量出土しており、覆土の特徴と合わせて近世・近代以降と判断した。礎石は18・33・38・43・47・49・51・55・107号ビット、1～9号礎石の計18カ所で確認でき、扁平の川原石を使用したものがほとんどであるが、33・51号ビットのみは方形に加工した角閃石安山岩(34・35)を使用していた。ほぼ底面に平に据えられた状況で確認されており、石材や加工状況から五輪塔の地輪を転用したものと思われる。これらの礎石の上面には、柱が立っていた時にできる柱の当たり痕や、礎石を埋める時にできる掘削痕は確認できなかった。この②のビットから1号建物を確認することができた。ビットが集中する調査区北側に位置し、規模は桁行(東西)4間以上(8.4m)×梁間(南北)2間(4.2m)で平面形態は長方形と思われる。柱間は東西が各2.0m、南北が推定で各2.1mである。該当するビット・礎石は18・33・38・43・51・54号ビット、9号礎石で54号ビットを除き礎石を作り。なお、1号建物、ビット・礎石の個別の詳細については一覧表(4・5表)にまとめて表記した。

第4表 1号建物一覧表

グリッド	A1 + 2 + B1 + 2 + C1 + 2	桁行	4間(8.4m以下)	梁間	2間(4.2m)	床面積	30.28m ² ±2	時期	近世・近代以前	構造	南北幅	方位	N 85° W
遺物番号	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	壁面	壁面レール (m)	深さ (m)	礎石の有無	地盤	距離 (m)	出土物	新旧関係	
P 18	円形	円形	45	43	106.71	34	直	P18 - P54	2.0	無	3・6 E, P 23 - 27・35・56・62・63・65・75(25-), 1土, 1溝, 6・7・		
P 33	円形	円形	41	36	106.62	38	直	P33 - 9号礎	2.0	土師器環(焼れ込み)	9号礎	P 15・19～24・28・32・34・39・41・46・52・53・60・61・62との新旧関係,	
P 38	円形	円形	54	46	106.65	35	直	P38 - P53	2.0	無	32・34・39・41・46・52・53・60・61・62との新旧関係,		
P 43	円形	円形	41	38	106.73	23	直	P43 - P51	2.0	無	9号礎は複数2段あり、裏打ちあり		
P 51	円形	円形	46	40	106.71	26	直	P51 - P54	2.0	無			
P 54	円形	平円形	34	32	106.83	17	直	P54 - P58	2.0	無	P 33・P 51の右側は複数2段あり、裏打ちあり		
9号礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	無	9号礎は複数2段あり、裏打ちあり		

遺構番号	グリッド	平面図	新規面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	石壁	出土遺物	新旧關係	時期	備考
101	C 4	円形	U字状	47	47	60以上	—	土師陶器	19・20世紀	古代	1号住居との範囲不明。
102	B 4	円形	V字状	32	25	15	—	—	13世紀	近世・古代以前	—
103	B 4	円形	楕円	30	25	15	—	—	—	近世・古代以前	—
104	C 4	円形	V字状	36	33	19	—	—	1世紀	近世・古代以前	—
105	B 2	円形	U字状	35	32	30	—	土師陶器・骨	—	古代	2号住居に作らび点。 1号住居に作らび点。
106	C 3	楕円形	楕円	27	27	13	—	—	—	古代	—
107	C 4	楕円形	楕円	60	41	21	有	—	1世・2世・3世紀	古代	在原・古代以前
108	C 4	楕円形	楕円	37	29	19	—	—	1世紀	近世・古代以前	—
109	B 4	円形	V字状	40	36	29	—	—	—	近世・古代以前	—
110	B 4	楕円形	V字状	30	22	22	—	—	30世紀	近世・古代以前	—
111	C 3	楕円形	V字状	29	23	15	—	—	1世紀	近世・古代以前	—
112	B 3	円形	V字状	40	36	25	—	—	—	近世・古代以前	—
113	B 3	楕円形	V字状	38	26	20	—	土師陶器・漆器陶片	—	古代	—
114	B 4	楕円形	V字状	29	18	20	—	—	—	近世・古代以前	—
115	B 4	円形	楕円	22	19	13	—	土師陶器・漆・鉄津	—	古代	—
116	B 4	楕円形	V字状	30	27	31	—	土師陶器	—	古代	—
117	B 3	楕円形	V字状	35	26	22	—	—	P 118 <	近世・古代以前	—
118	B 3	楕円形	V字状	26	25	13	—	—	P 117・P 121 >	近世・古代以前	—
119	B 5	円形	V字状	23	20	12	—	—	—	古代	—
120	B 5	楕円形	楕円	20	19	05	—	土師陶器	—	近世・古代以前	—
121	B 5	楕円形	楕円	20	20	15	—	—	P 119 <	近世・古代以前	—
122	B 5	楕円形	楕円	31	27	16	—	—	3溝	近世・古代以前	—
123	B 5	楕円形	楕円	32	22	19	—	—	3溝	近世・古代以前	—
124	B 5	楕円形	V字状	30	27	44	—	—	37世紀	近世・古代以前	—
125	C 2	楕丸形	U字状	36	30以上	22	—	灰陶陶器	9世紀	3世紀	古代
126	C 1	楕丸形	U字状	25	13以上	22	—	—	28世紀	近世・古代以前	—
127	B 3	楕丸形	楕円	27	18以上	36	—	—	28世紀	近世・古代以前	—
128	B 3	楕丸形	楕円	38	20以上	25	—	—	28世紀	近世・古代以前	—
129	B 5	楕円形	V字状	46	35	16	—	土師陶器・漆器陶片・灰陶陶器	3溝	25世紀	古代
130	B 5	楕円形	V字状	46	40	19	—	—	25世紀	古代	—
131	B 5	円形	U字状	24	22	38	—	—	24世紀の範囲不明	近世・古代以前	—
132	G 13	楕円形	楕円	34	31	7	有	鉄津	P 55 <	近世・古代以前	—
133	G 13	楕丸形	楕円	89	87	8	有	土師陶器	—	近世・古代以前	出土遺物は流れ込み
134	G 13	楕丸形	楕円	97	83	13	有	土師陶器	—	近世・古代以前	出土遺物は流れ込み
135	B 3	—	—	—	—	—	—	—	—	近世・古代以前	—
136	A 3	—	—	—	—	—	有	—	—	近世・古代以前	—
137	A 2	楕円形	楕円	26	44	12	有	—	—	近世・古代以前	—
138	A 2	楕円形	楕円	26	21	7	有	—	—	近世・古代以前	—
139	B 2	楕円形	楕円	41	25	7	有	—	—	近世・古代以前	—

5. 堀

調査区南端のC12・13 グリッドで堀を1条確認した。堀は、安全面を考慮して調査区南側中央部分に南北方向のトレンチ（2～3m × 9m）を設定し、地表面下約4 mまで掘り下げて調査を行った結果、ほぼ東西に延びる堀の北側斜面部を確認した。堀の斜面は上位が緩傾斜、中位以下が急傾斜になることから断面形は、薬研状と推測される。覆土の状況は、10層に分層した内の1～8層は北→南への斜位の堆積で、各層共通してブロック状の堆積であることから人為的埋め戻し土の可能性が高い。土壠の痕跡は削平され発掘調査ではその痕跡は確認できなかったが、「再築前橋城絵図」（群馬県立文書館所蔵）には土壠が描かれていることを考えると1～8層の堆積は、明治時代に堀を埋め戻す際に使用した土壠構築土の可能性が考えられる。また、9・10層は、水成堆積の自然埋没土で堀が機能していた時期の堆積土と思われる。遺物は何れの層からも出土しなかった。この堀は「再築前橋城絵図」を見ると、再築前橋城（約130年前）の柿之宮門の北側をほぼ東西に延びる堀と考えられ、堀の中心は現在、調査区南隣の国道17号下部に位置するものと思われる。

6. 溝

東西方向に直線的に延びる溝を2条確認した。2・3号溝とも掘り込みが浅く、底面はほぼ平坦である。断面形は浅い台形状であるが、2号溝は東側で1段深く掘り込まれており断面形が弧状に変化する。遺物が出土していないため時期は不明だが、周辺で確認した近世・近代以降の1号建物やビットの覆土と類似することから、ほぼ同時期のものと思われる。用途は、建物の雨落ち溝や区画溝の可能性が指摘できるが、これに伴う建物は確認できなかった。なお、遺構図の詳細については一覧表にまとめて表記した。

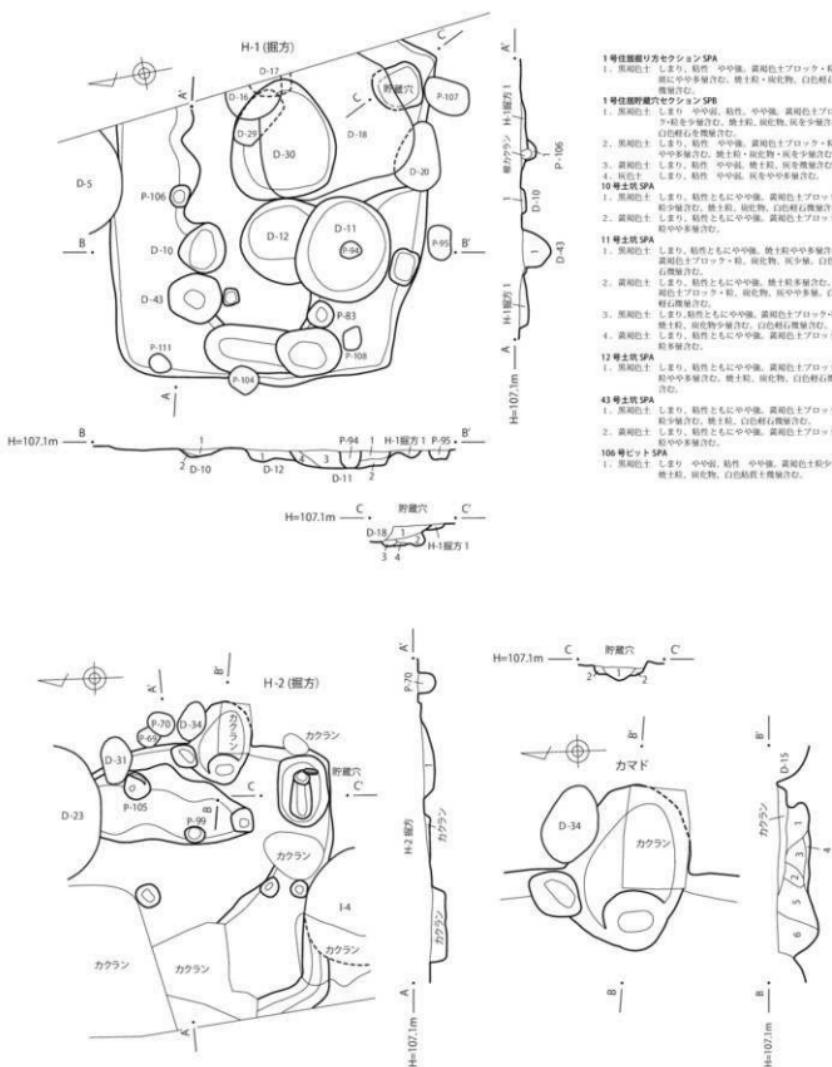
第6表 溝一覧表

遺構番号	グリッド	新規面状	掘出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	方向	出土遺物	新旧關係	時期	備考
2	B 2 + C 3	円形	9.2以上	50	17	N 85° E	—	P 55 <	近世・古代以前	西面へ伸びる
3	B 5 + C 5	楕円形	4.4以上	49	11	N 0°	—	26世・P122 < , 24・25世・P131・123・129・130 >	近世・古代以前	東面へさらに伸びる

7. 遺構外出土遺物

試掘調査で古墳時代・奈良・平安時代・近世・近代以降の遺物が調査区北東部分を中心に少量出土した。その中で比較的残存率が良く、器形や時期、用途が特定できた5点を掲載することとした。(30)は古墳時代の土師器杯(大型)の完形品、(31)は奈良・平安時代の須恵器蓋片である。近世・近代以降の遺物は、(32)が培塿である。(33)の砥石の石材は砥錐石で全面(5面)使用されている。時期は不明である。

以上の遺物の詳細については、第7表：遺物観察表の遺構外遺物の観に示したとおりである。



第6図 1・2号住居跡構造図

2号住居跡裏方セクションSPA

1. 黒粘土土: しまり 中堅性 粘性 中や強、黄褐色土・白色粘土ブロック・粘土を混じる。白色粘石を微量含む。

2号住居跡マドセクションSPA

1. 黒粘土土: しまり 中堅性 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2. 黒粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

3. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。

4. に高さ: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。

5. 小粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。黄色粘土・白色粘土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

6. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2号住居跡窓穴セクションSPA

1. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

1号住居跡リカバーションSPA

1. 黒粘土土: しまり 中堅性 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。黑色粘土・褐色土・褐化物。白色粘石を微量含む。

1号住居跡窓穴セクションSPA

1. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。黑色粘土・褐色土・褐化物。白色粘石を微量含む。

2. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土・褐化物。白色粘石を微量含む。

3. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土・褐化物。白色粘石を微量含む。

4. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土・黄褐色土・褐化物。白色粘石を微量含む。

10号土坑SPA

1. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土上ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2. 黄褐色土: しまり 粘性 中や強 黑粘土上ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

11号土坑SPA

1. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土や多量含む 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2. 黄褐色土: しまり 粘性 中や強 黑粘土多量含む 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

3. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土や多量含む 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

4. 黄褐色土: しまり 粘性 中や強 黑粘土や多量含む 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

12号土坑SPA

1. 黑粘土土: しまり 粘性 中や強 黑粘土上ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

2. 黄褐色土: しまり 粘性 中や強 黑粘土上ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

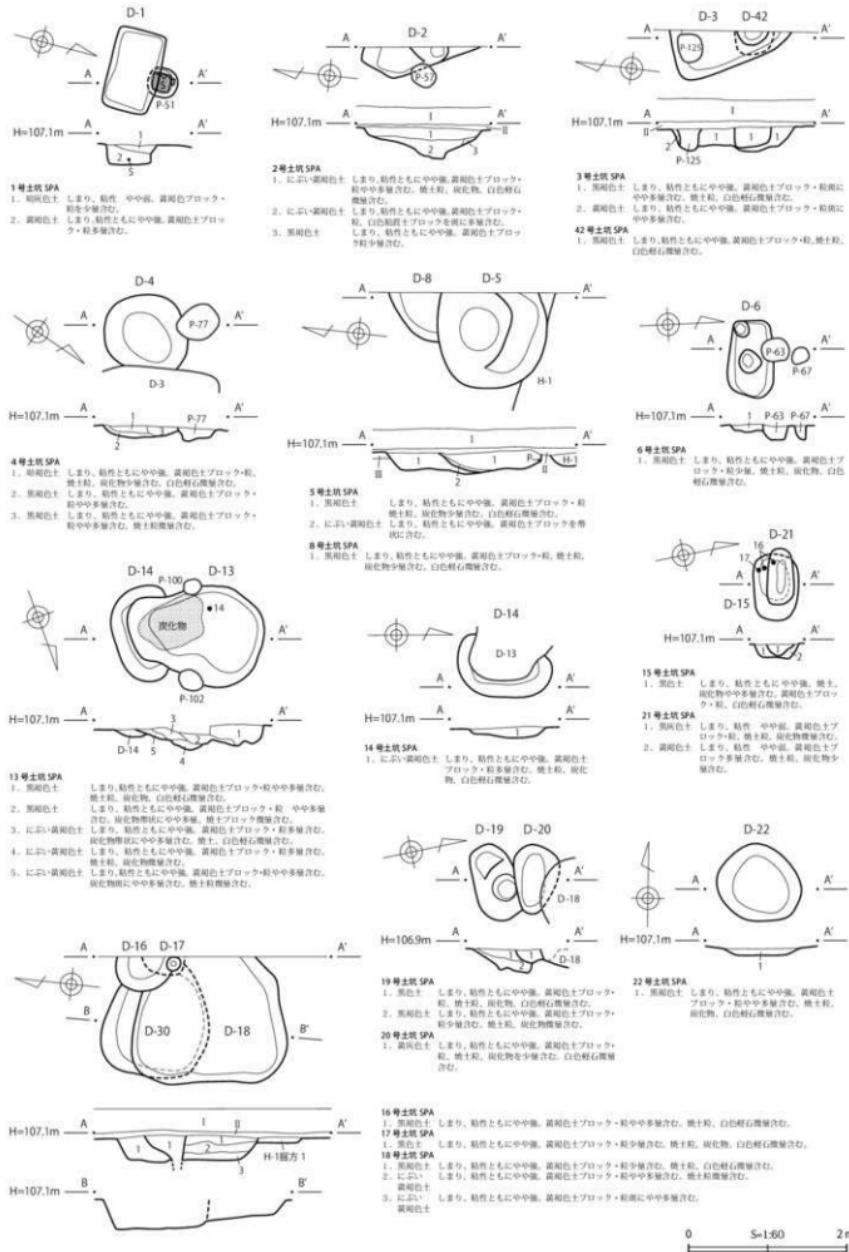
3. 黄褐色土: しまり 粘性 中や強 黑粘土上ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

106号ヒトSPA

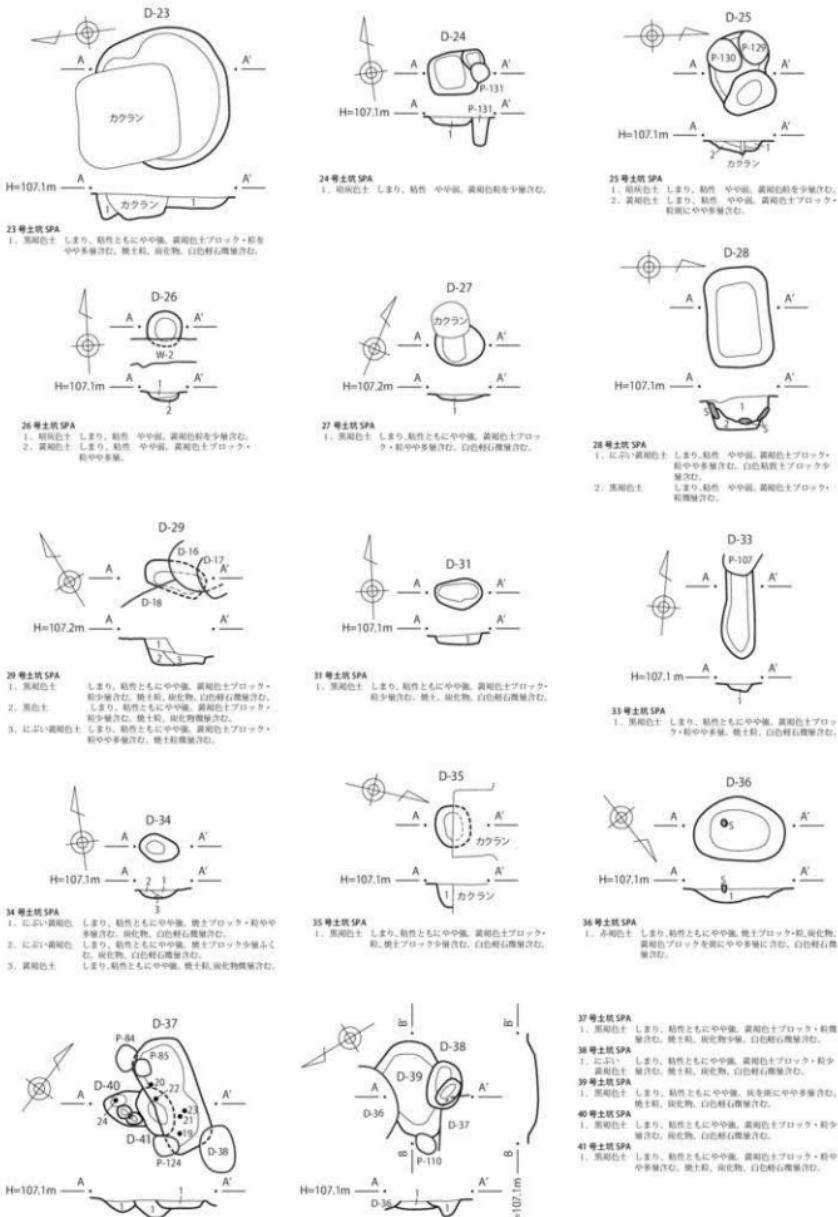
1. 黑粘土土: しまり 中や強 粘性 中や強 黄褐色土ブロック・粘土を少量含む。白色粘石を微量含む。

0 S=1:30 (カマド) 1m

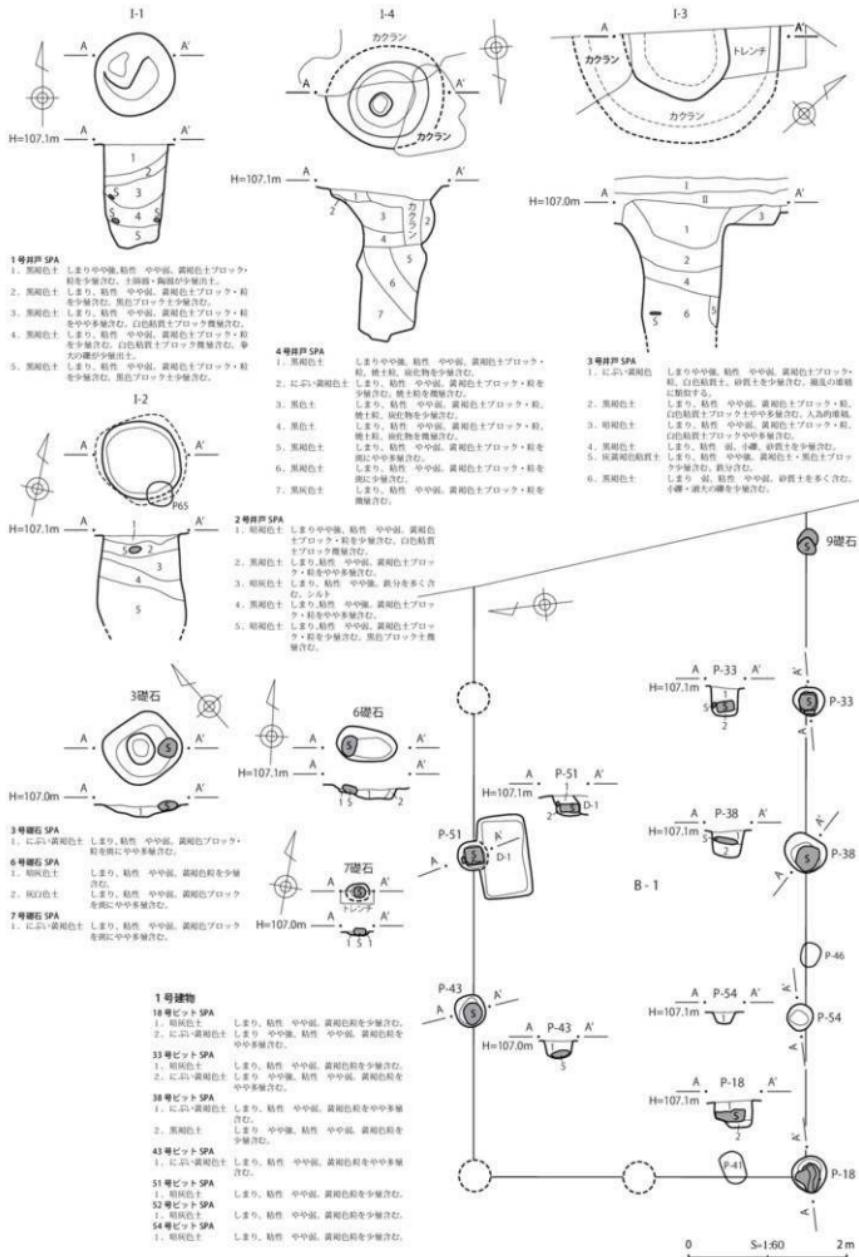
0 S=1:60 2m



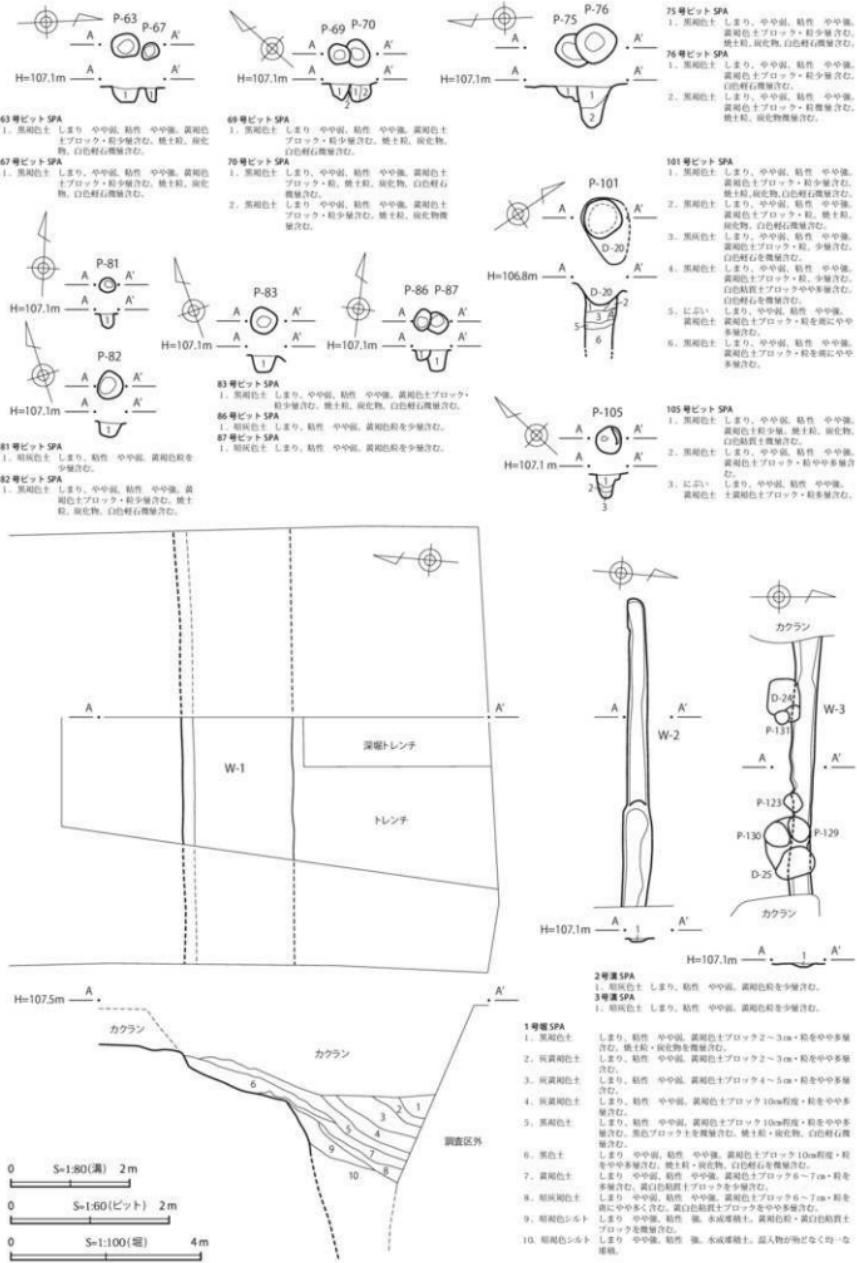
第7図 土坑遺構図（1）



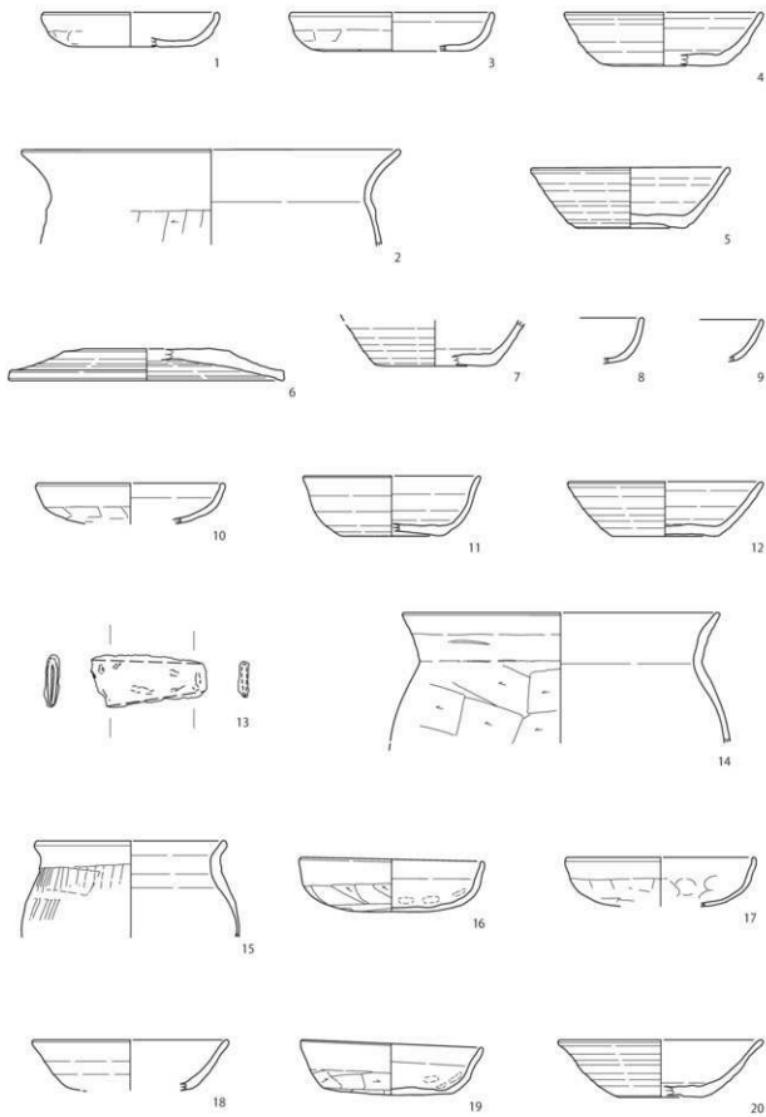
第8図 土坑遺構図（2）



第9図 1~4号井戸・1号建物遺構図

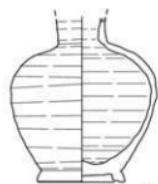
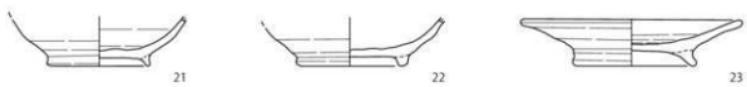


第10図 1号堀・2・3号溝透構図



第11図 出土遺物実測図（1）

1～20 (1/3)



24



25



26



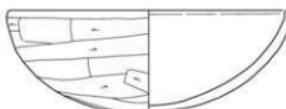
27



28



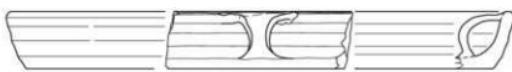
29



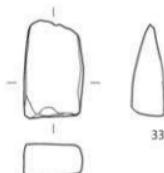
30



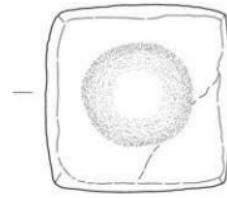
31



32



33



34



焦げ目

(1/6)

第12図 出土遺物実測図（2）

21～33 (1/3)

VI まとめ

古代の土坑について

「V章 2. 土坑」の項で詳細について述べているため、本項では概略的なことについて触れたいと思う。本調査区で確認した35基の土坑の内、住居の床下土坑と考えられるものが8基、カマドの掘り方部分と考えられるものが3基確認されている。調査区内の削平が深く及んでいるため、周辺に住居の掘り方プランや貯蔵穴、ピット等に該当するような施設は確認できず、また配置関係も示せなかつたため住居と判断できなかつたが、これらの土坑が住居の施設であることはその特徴からほぼ間違いないと思われる。1・2号住居のように掘り方部分が辛うじて残存している場合は住居として認識できるが、掘り込みが浅い住居であれば、後世の削平により、床下土坑、カマド、ピット、貯蔵穴のみが残存する形になるであろう。このように、本調査区には確認した1・2号住居以外にも、ほぼ同時期の住居が少なくとも数件は存在していたものと考えられる。

再築前橋城の堀について

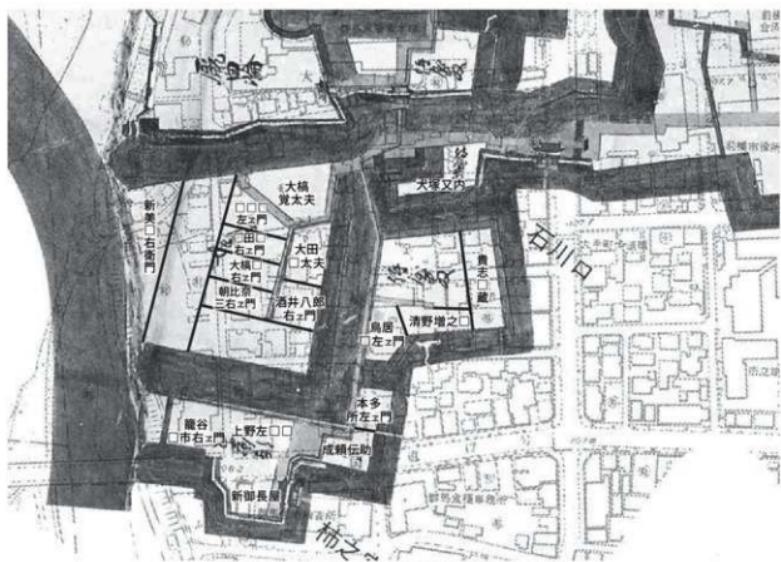
調査区南端で再築前橋城の堀を確認した。「再築前橋城絵図」によると、この堀は柿之宮門の北側を東西に延びる堀にあると判断できる。この絵図に描かれている土堀の痕跡は、後世の削平により発掘調査では確認できなかつたが、堀の上層には土堀の埋め戻し土と思われるブロック土が厚く堆積しており、再築前橋城廃城後、間もなく埋め立てられたことが想像できる。今回の調査では調査区の関係や安全面から堀の北斜面部のみの確認に留まつた。しかし、発掘調査の結果と「再築前橋城絵図」との照合により再築前橋城の堀である確認が得られたことは大きな成果である。なお、堀の詳細については「V章 5. 堀」の項で詳しく述べているので参照されたい。

再築前橋城の本遺跡の環境について

今回確認した近世・近代以降の遺構は、建物1棟、ピット・礎石101基、土坑5基、井戸1基が確認されているが遺構面の削平が著しく、しかも遺物の出土も微量に留まるため、どの時代に帰属するかは判断できない。第13図の酒井氏時代の前橋城屋敷配置図と、第14図の松平氏時代の再築前橋城屋敷配置図を見ると、各曲輪内には侍屋敷が存在していたことが判明している。酒井氏時代の近世前橋城屋敷配置図は、貞享4年(1687)の前橋城絵図と前橋市都市計画図を重ねた図面(前橋市觀光協会発行)に、屋敷の地割図を記載したもので、絵図と都市計画図との間でズレが生じており本調査区の位置や居住者を特定できなかつた。一方で、再築前橋城時代の屋敷配置図は、若干のズレはあるが本調査区の位置と居住者を特定することができた。そこで、再築前橋城における本遺跡の環境について若干触れていみたいと思う。

本調査区は再築前橋城時代は南曲輪と呼ばれ、南側には柿之宮門が在り、北側には堀と土堀を挟んで二の丸に続く九丈堀門が、西側には水曲輪に続く石川門が存在する。この南曲輪内には、要所に折り(鉤型)が設置された道路によって区画され、その中に16区画の侍屋敷が整然と配置されていた。そこで慶応3年(1867)の「再築前橋城屋敷配置図」(第14図)で侍屋敷の居住者を見ると、本調査区は「牧 郡平」の屋敷であることが判明した。この人物は天保4年(1833)の給帳の家臣団を見ると「牧 郡平」に150石を与えたと記されている。屋敷地は土堀と堀(1号堀)を挟んで柿之宮門の北側に位置し、この屋敷に該当する範囲からは1号建物のほかに、ピット・礎石、土坑、井戸が確認されている。聞き取り調査では、1号建物やピット・礎石が多数確認されている調査区北側部分に江戸末期～昭和50年頃まで蔵が在ったとの証言が得られており、この蔵が1号建物の可能性が考えられる。また、1号建物の北西約3mには石垣と思われる3号井戸が確認されている。同曲輪内には、「牧 郡平」のほかに、天保4年(1833)の給帳に200石が与えられたと記されている「長崎 九兵衛」や、前橋藩から禁裏御所御守衛新兵として京都に派遣された「大嵐 熟」、將軍上洛供奉時に小姓役に命ぜられた「匂坂 備」などの人物の屋敷が存在する。

最後に、今回の調査では再築前橋城の堀が確認されたこと、南曲輪内の侍屋敷の居住者、その要職や経歴が判明したこと、発掘調査の成果と文献・資料、聞き取り調査の結果がほぼ一致したことは大きな成果である。今後、発掘調査の蓄積によって、さらに解明されることを期待したい。



第13図 享保元年(1716)近世前橋城屋敷配置図



第14図 慶応3年(1867)再築前橋城屋敷配置図

参考文献

- 前橋市 1973 「前橋市史」 第1巻 前橋市史編纂委員会
 前橋市 1973 「前橋市史」 第2巻 前橋市史編纂委員会
 前橋市 1975 「前橋市史」 第3巻 前橋市史編纂委員会
 群馬県 1991 「群馬県史」 史編纂2 開始・古代2 群馬県史編さん委員会
 群馬県 1990 「群馬県史」 史編纂4 近世1 群馬県史編さん委員会
 梶澤克典・笠原仁史 2008 「前橋城・車籠門丸岡出櫓構の調査」 前橋市教育委員会
 松原孝志 2002 「前橋城下曲輪地図」 群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書
 石守 真 2007 「前橋城二ノ丸遺跡」 群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書
 荒井秀樹 1996 「前橋城三ノ丸遺跡」 前橋市方・家庭裁判所遺跡調査会
 藤谷泰男・片野進二・巾 隆之・樋口正信 1999 「前橋城跡跡II」 群馬県教育委員会
 高柳空・小堀尚 2004 「前橋城」 前橋市埋蔵文化財発掘調査会
 山下俊信・大庭裕泰明・笠原仁史 2008 「南町市之坪跡跡」 前橋市教育委員会
 山下俊信・大庭裕泰明・笠原仁史 2008 「天神道跡」 前橋市教育委員会
 久保田貞一・神崎剛・清水亮介 2008 「元老社跡跡跡(13)」 前橋市埋蔵文化財発掘調査会
 1996 「関東の華・前橋城」 前橋市教育委員会

報告書抄録

書りがな	まえほじょう（みなみくるわちてん）						
書名	前橋城（南曲輪地点）						
副書名	地域活力基盤創造交付金事業（都市計画道路前橋公園通線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	神宮暁・高階敏昭						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査会						
所在地	〒371-0018 前橋市三保町二丁目10-2 TEL 027-231-9531						
発行年月日	西暦2009(平成21年)12月28日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
前橋城（南曲輪地点）	前橋市大手町一丁目135-1他	市町村 10201	北緯 21H-48	東経 36° 23° 16°	調査期間 20090630 ～ 20090722	約500m ²	道路改良工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	要約		
前橋城（南曲輪地点）	集落	奈良・平安	住居	2軒 楕・蓋・灰釉陶器環 土坑	土師器环・甕・須恵器环・ 楕・蓋・皿・甕・長颈瓶、 灰釉陶器环・皿、刀子	住居は削平が著しく、確認できたのは 掘り方部分のみである。時期は9 世紀代である。土坑は住居の床下土 坑や、カマド掘り方の残存部分であ る可能性のもののが含まれる。 時期は8世紀末～9世紀代の遺物が出す る。	
			井戸	3基 土師器环・甕・須恵器环・ 灰釉陶器碗・縁付陶器	以上のことから住居数は確認した2 軒を上回る軒数が存在していた可能 性が考えられる。		
			ピット	30基 土師器环・甕・須恵器环・ 蓋・甕・灰釉陶器碗			
			城	近世・ 近代以降	堀	1条 遺物なし	再築前橋城（柿之宮門北側）の堀の 北側斜面部分を確認した。堀の中心 は国道17号下に位置するものと思 われる。 土堀の痕跡は確認できなかった。
	蔵・屋敷	近世・ 近代以降	土坑	5基	陶磁器	発掘調査、文献・資料、聞き取り調 査の結果、本調査区が立地する南曲 輪は、近世前橋城時代と再築前橋城 時代は侍屋敷であったことが確認で きた。再築前橋城時代の本調査地は 藩から150石を与えられた家臣である 「牧 郡平」家の建物である可能 性が考えられる。聞き取り調査でも 江戸末期から明治初期頃に建てられ た蔵が、昭和時代まで存在していた との証言も得られた。	
			建物	1棟	遺物なし		
			ピット・礎石	101基	陶磁器		
			溝	2条	遺物なし		
			井戸	1基	須恵器环・甕（流れ込み）		

写 真 図 版



調査区北側 全景 北から



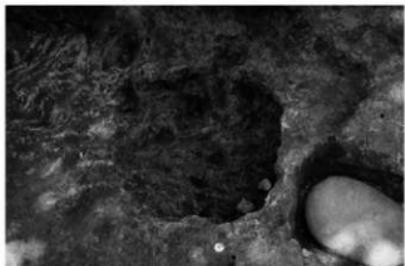
調査区北側 全景 南から



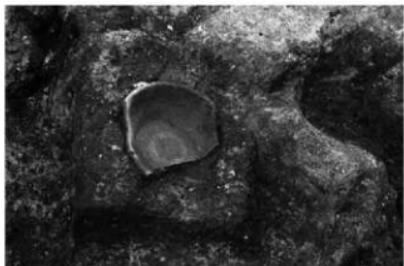
1号住居 遺構確認状況 西から



1号住居 掘り方全景 北から



1号住居 貯藏穴 全景 西から



1号住居 掘り方遺物出土状況 西から



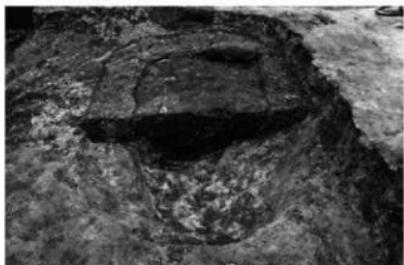
2号住居 遺構確認状況 西から



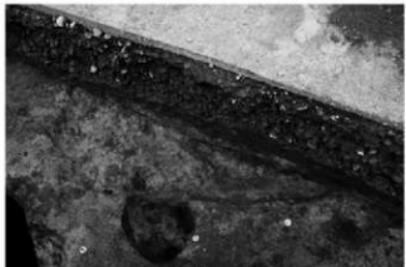
2号住居 掘り方全景 西から



2号住居 カマド 掘り方全景 西から



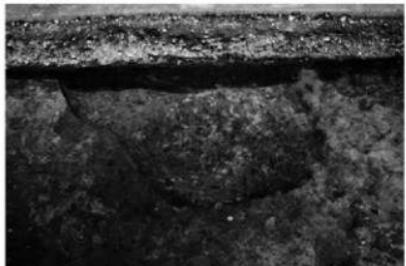
2号住居 貯藏穴 セクション 西から



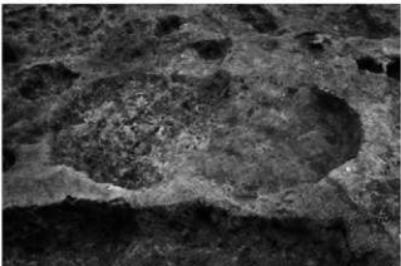
2号土坑 全景 南西から



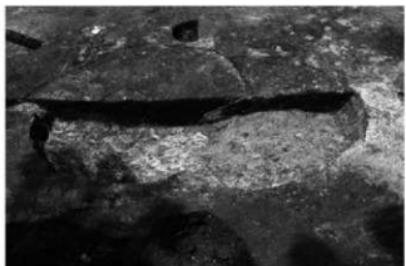
4号土坑 セクション 東から



5・8号土坑 全景 東から



11・12号土坑（1号住居床下土坑）全景 東から



11・12号土坑（1号住居床下土坑）セクション 東から



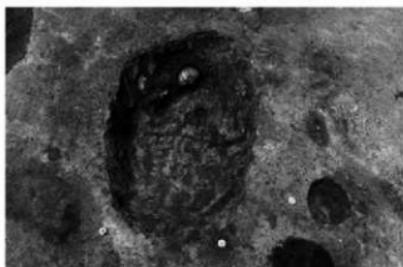
13・14号土坑 全景 南から



13号土坑 炭化物・土器出土状況 南から



13号土坑 遺物出土状況 西から



15号土坑 全景 東から



15号土坑 遺物出土状況 北東から



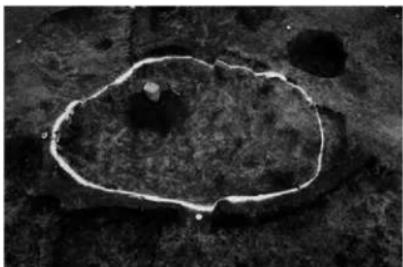
18・30号土坑 全景 西から



28号土坑 碓出土状況 東から



34号土坑 セクション 南から



36号土坑 全景 北から



36号土坑 セクション 北から



36号土坑 遺物出土状況 北西から



36～41号土坑周辺 全景 南西から



37号土坑 遺物出土状況 北西から



37・40・41号土坑 セクション 西から



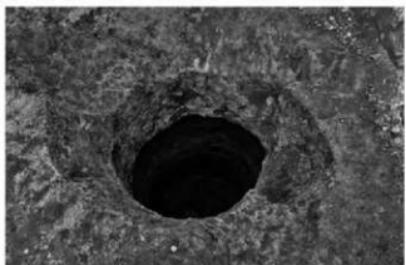
1号井戸 セクション 南から



2号井戸 セクション 南から



3号井戸 セクション 南から



4号井戸 全景 北から



調査区北側ピット群 全景 北東から



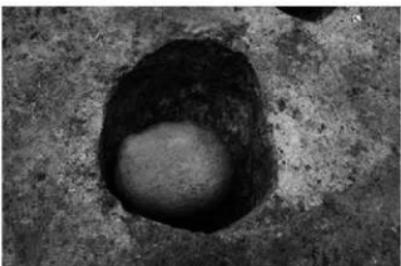
1号建物 全景 東から



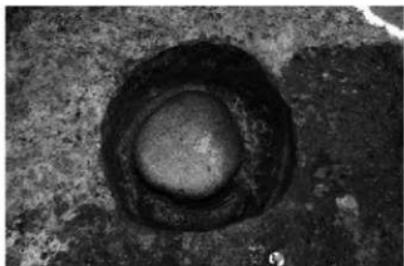
遺跡地東に隣接する明治初期の蔵 北東から



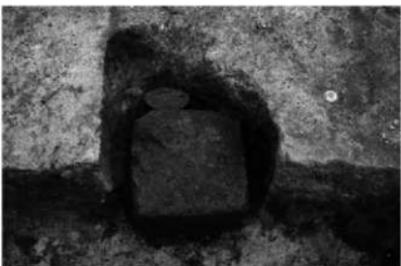
1号建物 (33号ピット) 確石確認状況 東から



1号建物 (38号ピット) 確石確認状況 南西から



1号建物 (43号ピット) 確石確認状況 東から



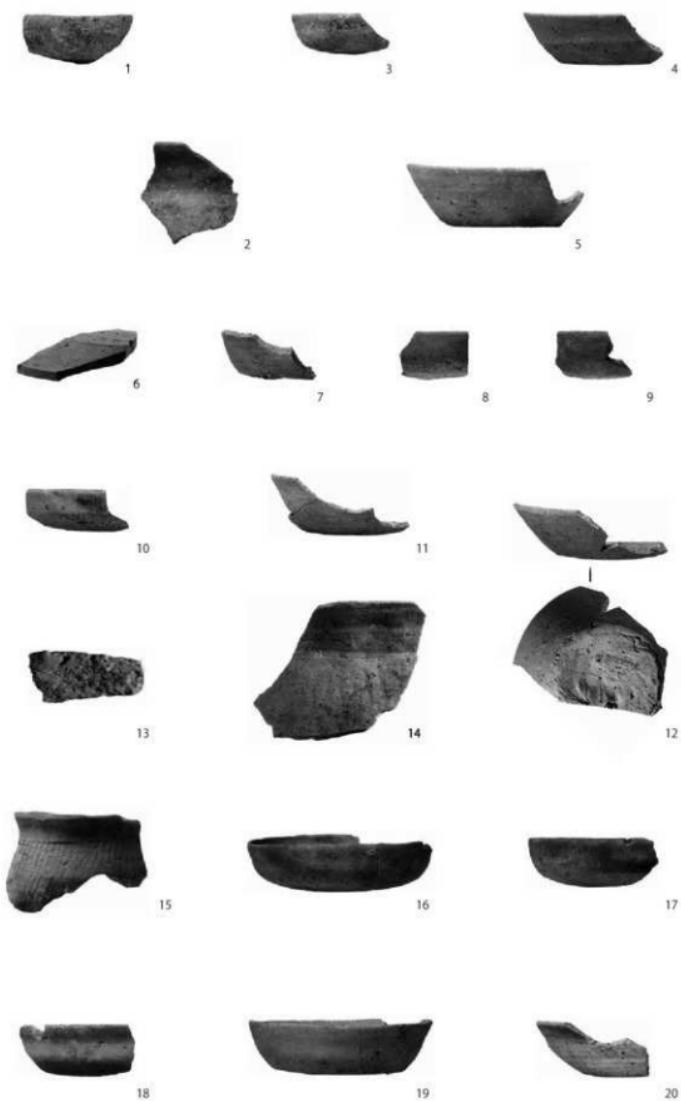
1号建物 (51号ピット) 確石確認状況 南から



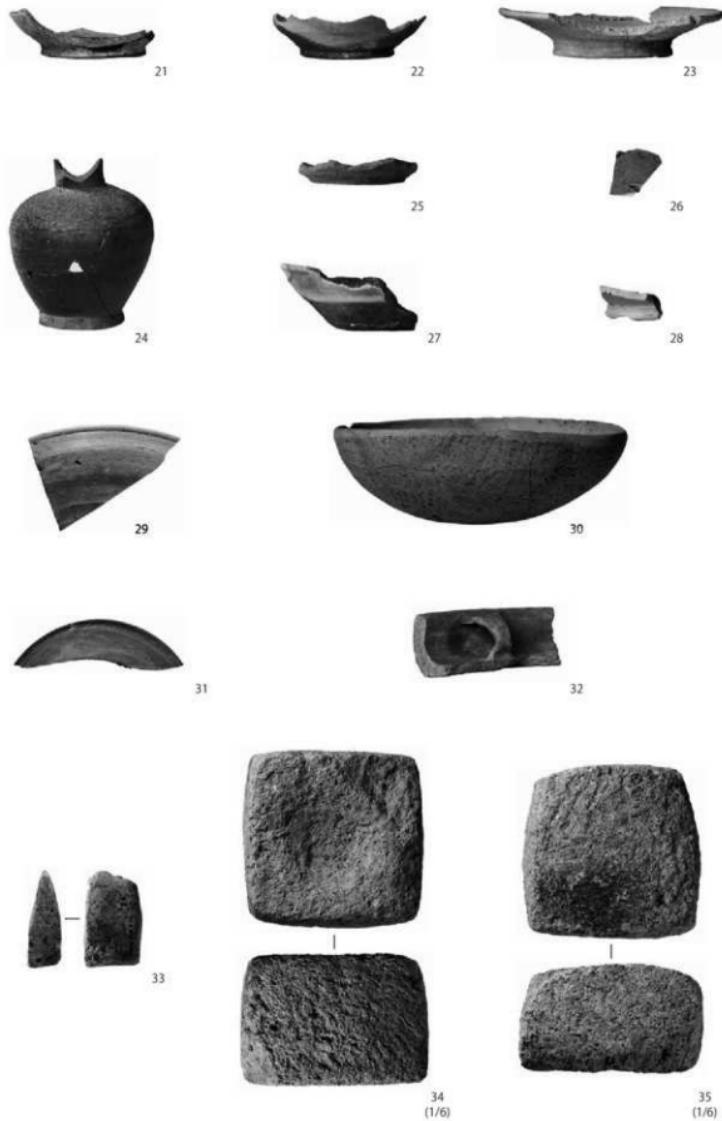
1号堀 全景 西から



1号堀 深掘後セクション 西から



遺物写真 1 ~ 20 (1/3)



遺物写真 21 ~ 33 (1/3)

前橋城（南曲輪地点）

印 刷 平成21年 12月 21日

発 行 平成21年 12月 28日

発 行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県前橋市三保町2-10-2
電話 027-231-9531

印 刷 朝日印刷工業株式会社

